

書評「職業としての科学」（佐藤文隆著，岩波新書，岩波書店，2011年1月，222ページ，新書判，定価：760円（税別），ISBN978-4-00-431290-1） 評・小出 仁（2011），地学雑誌，120（6），（地学ニュース）N15-N17

佐藤文隆：職業としての科学 岩波新書，岩波書店，2011年1月，222ページ，新書判，定価：760円（税別），ISBN978-4-00-431290-1

「科学はリスクな職業と化し，もはや聖域ともみられなくなった」（本書カバーより）。2011年3月11日東日本大震災の直前に出版された本書は，まもなく科学が信用を失うことを予言している。

「科学研究という業界の世間からの信用はがた落ちとなるであろう」（本書13ページ）。実際に東日本大震災後，“専門家”の言う「安全です」という言葉は，政府やマスコミと同様に，全く信用して貰えなくなった。本書に書かれていることが，科学者が信用を失うに至った原因の一つになっている。

近年，科学を見る世間の目はゆれ動いていて，2008年には4人もの日本人がノーベル賞を受賞したことに喝采したが，その一方で科学技術予算も「事業仕分け」の対象になり，「世界一でないとなぜだめなのか」と詰問されている。科学は聖域という意識がある一方で，現実には科学はリスクな職業選択になっていると本書は指摘する。2011年FIFA女子ワールドカップで逆転優勝した“なでしこジャパン”サッカー日本代表チームの選手たちが，実はほとんどが不安定な就職条件にめげずに頑張っている状況とも重なって見える。紙

一重の差でも“なでしこジャパン”が世界一にならなければ，日本政府から国民栄誉賞授与も女子サッカー支援充実もなかったに違いない。科学者はそれぞれの分野（ごく小さな分野かもしれないが）で常に世界一を争っていないければならない宿命にあり，世界一になるかならないかが文字どおり死活問題という姿は，科学者の多くがおかれている立場でもある。

世界の研究者数約600万人の1割強（約70万人）が日本の研究者で，人口比では日本は断然トップで，科学者数大国である。「科学技術創造立国政策」により，科学技術系人材の養成・確保など科学技術の振興が掲げられ，財政悪化の中でも科学技術関係費は確実に増額されてきた。ところが，現実には不安定な任期付の流動研究員の数や時限付きの組織の数ばかりが急増し，数少ない安定ポストを目指す競争が激化し，結婚や子育てを犠牲にする事態も生じている。将来を期待されていた若者が勤勉に努力した結果として，このような希望の無い困難に陥るとなれば，親や周囲がこんなリスクな職業選択に不安を持つのは当然であろう。

19世紀後半まで科学者という職業は存在しなかったという。“専門研究者”が登場し，現在のような制度科学への歩み始めるのは19世紀後半からなので，日本はそれほど遅れていない。現存するもっとも古い学会である英国のロンドン王立協会（単に王立協会と言えば，この会を指す）は1660年の創立である。創立当時，王からの資金援助はなく，王立と名乗ったのは，むしろその権威を背景に他からの干渉を防ぎ，知識の自由な交換の場にするためであった。当初のメンバーは社会的地位の高い人士で，“知識を生み出す人”とそれを支援するパトロンのクラブであった。初期に20年以上も会長を

務めたニュートンを例外として、会長の多くはパトロンの方で、科学者の代表が会長ということになるのは19世紀後半以降である。

ちなみに、本誌（地学雑誌）を発行する東京地学協会は、1879（明治12）年に設立された日本では最も古い学会の一つであるが、英国の王立地理学協会の影響を強く受け、ロンドン王立協会同様に外交官・軍人・政治家・貴族など高位高官が集まるサロンであった。当初は科学者はまだ少数であったが、文明開化の先達として文化促進の意欲が強く、地学上の知識の吸収や普及には貪欲であった。科学者・学生による地学会が地学雑誌を創刊する明治22(1889)年になると気鋭の日本人科学者が現れ、帝大理科大学地質学科の学生山上萬次郎が石炭燃焼による二酸化炭素排出の地球環境への影響について先駆的な論説を書き（小出，2008），地質局（地質調査所）次長兼理科大学教授の構造地質学者原田豊吉は2011年東北地方太平洋沖地震震源域での地震発生を120年以上前に警告している（小出，2007）。地学会は財政の豊かな東京地学協会に合併し、明治26(1893)年から地学雑誌は東京地学協会の機関誌になる。東京地学協会の会長は創立以来皇族・貴族が継承し、科学者が会長になるのは1971年以後である。現在の東京地学協会会員は地学の専門家や愛好家で、「地学クラブ」などに若干サロンの雰囲気を残すのみになっている。

本書の内容に立ち返ると、現在の科学技術は巨大な社会資源になっているという。科学の根は工夫と知的自由であって、同好の士が集まる自主組織ができて進歩してきた。科学技術が産業・社会に役立つようになると、産業や国家に雇われた専門の専門家が現れ、科学が職業になった。近年は、「科学技術創造立国政策」で象徴され

るように、科学技術と国家政策は深く結びつき、急速に巨大化している。もともと知的自由に立脚している科学者の精神と、巨大化した科学技術の社会的役割の間には、さまざまな乖離が生じていて、放置できなくなっていると本書は指摘する。科学は大きな転換期を迎えている。日本の科学者数は小中高の学校教員数を上回る勢いで増えている。それほど多数の天才がいるはずはないから、平均的な知的水準は高いであろうが、科学者の多くは常人である。科学の制度は天才のための制度ではなく、常人の職業として持続可能でなければならないという。本書末尾（214ページ）の「天才には制度論などは不要なのである。」という言葉は、老境に入った科学者の一人には痛切に響く。

本書は「職業としての科学」というタイトルから思い描くかもしれないハウツー(How-to)本ではない。つまり科学者として就職する方法などは書かれていない。科学政策を論じた本でも、科学者としての心得を書いた本でもない。科学が職業になる歴史を語りつつ、研究者として生きてきた筆者の自省の書であると著者は書いている。科学者・研究者には思い当たることの多い書で、人間としての科学者を理解するための一助になろう。科学者や科学者の卵だけでなく、科学政策や科学行政にかかわる人々、さらには科学に親しむかあるいは不信を持った多数の人々に読んでもらいたい本である。

小出 仁(2007)地学雑誌 第一集第一巻（明治22年）「日本地質構造論」原田豊吉：夭折した先駆者、地学雑誌, **116**, 294-296.

[Koide,H.(2007):Toyokichi HARADA: The early pioneer “Geotectonics of Japan” Journal of Geography Vol.1,No.2,February 1889, Journal of Geography (Chigaku Zasshi) , **116**, 294-296.]

小出 仁(2008)地学雑誌 第一集第十二巻（明治22年）「石炭の消費は大気の質を変ずることなきや」（山上萬次郎）：地球環境問題に

気付いた科学者の卵、地学雑誌, **117**, 817-820. [Koide,H.(2008):Manjiro YAMAGAMI:

Does the combustion of coal change the nature of the atmosphere? Journal of Geography Vol.1, No.12, December

1889, Journal of Geography (Chigaku Zasshi) , **117**, 817-820.]

(小 出 仁)